

淡江大學日本語文學系服務課程之考察研究

—以四年級會話導覽服務課程為例—

黑島千代

淡江大學日文系講師

劉德敏

淡江大學日文系研究生

彭春陽

淡江大學日文系副教授

摘要

淡江大學日文系自 98 學年度起，為配合教育部服務教育課程，將四年級必修科目「日語會話(四)」11 組當中，增設服務導覽組。課程的設計希望能夠符合教育部服務課程的要求。每位同學一年當中必須要從事 36 小時的義工服務。因此，教室學習的部份，大多使用於因應義工活動所需之前置學習。前置學習之目的，在於認識淡水古蹟的歷史背景及文化遺產的意義，以及發掘淡水新的觀光資源、並接觸淡水行政單位及文化財團所致力開拓之觀光產業。

本研究由擔任本課程授課之黑島千代、從事教學助教之劉德敏、以及課程設計之彭春陽共同執筆。本研究之目的為回顧一年來實施之成效，調查同學學習過程之意見，企圖改善本課程未來之規劃及實施。

關鍵字：服務課程 義工 日語導覽課程 淡水 觀光

A consideration about the volunteer class in department of Japanese of Tamkang University ; Through the practice of a volunteer guide

Kuroshima Chiyo

Lecturer, Tamkang University, Taiwan

Liu, Te-min

Graduate School Student, Tamkang University, Taiwan

Perng, Chun-young

Associate Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

Our department has set up "Japanese guide class" in this subject of "Japanese conversation 4" according to the service curriculum of the Ministry of education at 98 academic years (2009). This is a part of the volunteer education. Students have the obligation of the volunteer work of 36 hours in one year. Therefore, the class in the classroom has executed some prior studies necessary for the volunteer work. Its prior study has purposes that understand the historical background of historic interests that exist in Tamsui and the meaning of the cultural heritage. Moreover, its purpose is to discovery the new tourist resources in Tamsui and to understand the sightseeing industry promotion of some related organizations.

This study is a joint writing of Kuroshia who takes charge of the class, Liu who takes charge of the class TA and Perng who has designed this curriculum. This study introduces this content of execution for one year, and searches for future tasks.

Keyword: service curriculum, volunteer, Japanese guide class, Tamsui, sightseeing

淡江大学日本語学科におけるボランティア授業に関する
—考察—ボランティアガイドの実践を通して—

黒島千代

淡江大学日本語学科講師

劉徳敏

淡江大学日本語学科院生

彭春陽

淡江大学日本語学科副教授

要旨

淡江大学日本語学科は教育部の服務教育課程に合わせるため、98学年度（2009年）から四年生の必修科目「日本語会話（四）」の11クラスの中から、一クラスを「日本語ガイドクラス」にすることを決めた。これは教育部指導によるボランティア教育の一環として組まれたプログラムである。一人の学生につき、年間36時間のボランティア活動が義務付けられている。そのため、教室活動はボランティア活動に必要な事前学習の時間に使われることが多い。事前学習の目的は、淡水にある古跡の歴史的背景や文化的遺産の意義を理解することで、そのほかには、淡水の新しい観光資源の発見と淡水の行政や文化財団が力を入れている観光への取り組みを理解することであった。

本研究は授業担当の黒島千代、TAを勤めた劉徳敏およびコースデザインの彭春陽が共同執筆したものである。この一年間実施してきたものを顧みて、学生たちの意見を調査し、今後の対策を探らうとするのが目的である。

キーワード：服務課程 ボランティア 日本語ガイドクラス 淡水
観光

淡江大学日本語学科におけるボランティア授業に関する —考察—ボランティアガイドの実践を通して—

黒島千代

淡江大学日本語学科講師

劉徳敏

淡江大学日本語学科院生

彭春陽

淡江大学日本語学科副教授

1. はじめに

ボランティア活動を実践したのは、四年生の必修会話クラスを履修した23名で、本年度初めて日本語学科で開講された科目である。「日本語ガイドクラス」とあるが、日本語観光ガイドの養成を目的したものではなく、教育部指導によるボランティア教育の一環として組まれたプログラムである。したがって、教室活動は日本語ガイドのボランティア活動に必要な事前学習のために使われることが多い。特に、ボランティア受け入れ先でのボランティアガイド講座の受講（事前学習）は義務づけられている。したがって、事前学習の目的は、淡水にある古跡の歴史的背景や文化的遺産の意義を理解することで、そのほかには、淡水の新しい観光資源の発見と淡水の行政や文化財団が力を入れている観光への取り組みを理解することであった。

そのほか、教室における学習としては、校外授業における講義やフィールドワーク後の日本語訳と、ボランティアガイド実習のためのシミュレーション授業である。発表までの作業はグループワークとした。

では、学生はこれらの事前学習で何を学んだのか、或いはどんな点で不足を感じたのか、日本語ボランティアガイドの実習を通して、どんな成果があったのかなど、学生の視点で見たものについては、後述する学生のサービス日誌や反省記録及びアンケートの回答から考察

する。全体としては、この一年間のボランティア授業の実践を振り返りながら、ボランティア活動を大学の授業に取り入れることの意義と学習効果を中心に考察を加えていく。

2. ボランティア授業の実践

2.1 大学教育とボランティア活動

サービスラーニング〔Service Learning〕について、サービスラーニングというのはアメリカで始まった教育法のことです。「学習効果を高め、市民的責任を教え、地域社会を強化することをねらいとして意味ある地域貢献活動に、事前の指導と事後の振り返りを取り入れた教育と学習の手法である」¹と紹介されている。他にも「学生がそれまで学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組みや進路について新たな視野を得る新しい教育プログラム」²と解釈されている。

日本の大学においても、筑波大学、広島大学、京都大学などの国立大学や、立命館大学、明治学院大学、早稲田大学などを始めとする私立大学など、多くの大学でサービスラーニング・プログラムが実施され、サービスラーニングの教育研究会³も開かれている。また、学生の個人的、課外活動的ボランティア活動を支援するセンターも設置されているが、近年は、ボランティア活動を社会福祉や教養課程の授業の一環とみなし、単位を認定している大学もある。

淡江大学でも、ボランティア活動を積極的に授業に取り入れる取り組みを始めている。しかし、実際に実施していくのは簡単ではない。実施の受け入れ先を探し、その実施機関との信頼関係を築いて、学生に対する指導監督と公正な評価についての依頼もしなければな

¹村上徹也「米国におけるサービスラーニング」で引用されている〔National Service-Learning Clearinghouse〕の定義

<http://homepage.mac.com/TKAIZAWA/japan-usSLexchange/> 『日本奉仕協会』

²ICU 国際基督教大学教養学部「サービスラーニング」

³広島大学産学・地域連携センター「サービスラーニング研究会」（2006）

らず、煩雑な手続きも多い。本学科の今年度における実践は初年度ということもあり、試行錯誤的実践であったが、日本の山口県立大学の実践⁴に見られるように、二年生の教養科目としてのボランティア科目を開講して、ボランティア専門家などを加えたチームを組んで、数年を経て完成していくプログラムもある。

なお、本学科の今年度の取り組みについては次に述べるとおりである。

2.2 日本語授業におけるボランティア活動の取り組み

(1) ボランティアガイドクラス開講の目的

筆者が担当したのは四年生の必修日本語会話（四）のクラスである。しかし、大学のサービス課程であるため、「ボランティアガイドのクラス」として位置づけられている。日本語学習者のボランティア活動であるため、大学で学んだ日本語能力を発揮する機会として考えられた淡水の観光ガイドである。

淡水は400年の歴史をもち、現在、旧市街地と郊外に23の建造物が文化財として認定されている。淡水は今、観光を中心に更なる発展を期して、町の整備や埋もれた古跡の保存など観光事業に力を入れており、海外からの観光客に熱い期待を寄せている。そこで、淡江大学の学生達が淡水の町の歴史と観光資源への理解を深めることができれば、淡水を訪ねる日本人観光客への日本語観光案内も可能となり、地域社会への貢献と卒業前の社会参加が可能になるのではないかと考えられ、ボランティアガイドクラスの開講となった。

サービスラーニングという観点でいえば、事前学習で学んだ淡水の歴史的知識や名所旧跡の解説を、どこまで日本人観光客にわかりやすく説明できるのか、という実践の難しさを体験できることも「学び」の一つである。さらに、ボランティア活動先で、専門ガイドや日本人観光客との協働により、新たな知識や日本語力を磨くことが

⁴藤田久美（2009）「大学の授業における『ボランティア』の教育方法に関する一試論」山口県立大学学術情報 『福祉学部紀要』第2号 133—150

できれば、会話の授業としてのコミュニケーション・スキルの獲得にも有効である。

(2) ボランティア活動における事前学習

【1】ボランティア実施機関の講座を受ける

淡水の観光案内のガイドであるため、淡水の歴史や行政の観光政策などの知識と情報を得ることが必至である。また、学習効果をあげるためには、事前学習—ボランティア活動—事後の学習という流れが必要である。事前学習は、淡水文化基金会の謝徳錫先生の講義については、火曜日の会話の授業時間を七回分使うことができたが、他の講義については、授業時間外の時間帯で実施せざるを得なかった。これらの事前学習には授業担当教員と TA が引率同行した。

◆ 淡水文化基金会常務理事・淡水社区大学副主任の謝徳錫氏による全課程七回の講義。

実際に現地を歩きながらの授業である。謝先生編集の貴重な史料を含むテキストを中心に淡水の歴史や文化について本格的に学習した。ただ、学生の感想としては、バスの運行回数が少ない所とか、一般には公開されていない水源地などを観光コースに加えるのは難しいというものが多かった。また、学んだ歴史的知識が多く、膨大な資料の翻訳もあり、それをさらに観光解説向けに日本語訳する難しさに頭を痛めたようである。

〈実施日〉

- | | | |
|-----|--------|---------------|
| 第1回 | 9月22日 | 滬尾街（滬尾は淡水の旧名） |
| 第2回 | 10月13日 | 岬角緑精霊 |
| 第3回 | 10月20日 | 澄澈雙圳頭 |
| 第4回 | 11月3日 | 緑蔭烏秋埔 |
| 第5回 | 11月24日 | 琅琅読書聲 |
| 第6回 | 12月15日 | 台北避暑地 |
| 第7回 | 12月22日 | 日本機関地 |

以上、移動時間も含めて毎回2時間半から3時間のフィール

ドワークである。

◆ 台北県立淡水古蹟博物館のボランティア養成講座（一日のみの研修）

講師は古蹟博物館の専門ガイドスタッフ三名。

この古蹟博物館は「紅毛城」「小白宮」「滬尾砲台」という三箇所の総称である。学生は週末を利用して、主にこの三箇所でボランティア活動を行った。

〈実施日〉

第1回 10月27日 紅毛城、小白宮、滬尾砲台の歴史的背景に関する講義と敷地内の見学

以上、移動時間も含めて5時間半のフィールドワークであった。時間が限られていたこともあり、ここは口頭での説明が多かったので、学生は必死でメモをとっていた。メモを取れないことについて、もっと早く書きとれるように工夫しなければならない、という学生の反省もあった。

◆ 淡水和平公園「一滴水記念館」のボランティア養成講座（一日のみの研修）

講師は国花文教基金会の邱明民氏（神戸大学博士）

〈実施日〉

第1回 12月8日 講義と「一滴水記念館」の見学

ここは淡水の新しい観光名所である。一般公開は8月の予定。日本の神戸市と台湾が同じ大震災の被災地という関係で、神戸のボランティアが台湾の復興活動に加わったことが縁で、築100年近い日本の古民家が台湾の淡水に移築されることになった。両地の延べ数百人のボランティアの手によって、解体から移築までのすべての作業が行われた。

以上、移動時間も含めて3時間半のフィールドワークである。

【2】教室活動——事前演習・課題の完成

教室活動の目的は、通訳ガイドのための日本語学習である。ボランティア活動実施前に、事前学習した名所旧跡の中から、自分でコースデザインしたものを日本語でガイドすることが主な学習内容である。ここでは、日本語表現、特に文法の誤用と「聞いてわかる日本語の語彙」と敬語の使用について、フィードバックしていった。また、ガイドクラスの特性として、観光地で誰を対象に何を解説するのかという課題がある。観光客はどこまで知りたいのか、その名所に関心があるのかどうか、説明に要する時間は何分が適当なのか、といった問題の解決である。

例えば、マカイ博士ゆかりの遺跡や偉業を解説する場合も、あるグループは台湾における婦女教育の貢献をとりあげ、あるグループは医療を取り上げるように違われ、固有名詞の翻訳も直訳なのか意訳なのか音訳なのか、といったさまざまな言葉の問題が浮き彫りにされる。

そのほか、学生の感想にもあるが、固有名詞の取り扱いが難しかったと指摘している。歴史的な事件や建築様式や祭祀に関する用語に限った事ではなく、お土産の名前ひとつとっても、文化の違う外国人に伝えるのは難しいものである。淡水名物の魚酥が「スナック」「クリスピー」「揚げ煎餅」かは、聞く人の年齢によって理解度が変化する。これは学生が訳した例だが、観光案内には歴史的な言葉の説明だけではなく、非常に身近な生活語彙の使用頻度も高い。

〈具体的な教室活動例〉

- ◇事前学習の講義はすべて中国語で行われ、配布テキストも中国語の資料である。そのため、日本人観光客向けに日本語訳をする。次に、教室での発表に向けて日本語ガイドのコースデザインとP Pを使ったレポートを作成する。
- ◇事前に講義を受けた複数の名所旧跡をグループ毎に発表。グループ内において、個人が担当する部分を明確にして、必ず全員が発表する。しかし、時間的に不十分であるため、個人的な指導の時間は少なくなり、本当に学生にとって必要な情報が与えられたの

か、ニーズに応えた指導ができたのかという教師の課題は残る。学生の感想の中に、もっと教師に教えてもらいたいことがあったので、「まだ足りないと思う」という指摘があった。

◇クラスメートからのフィードバックは、ガイドの説明を聞いている日本人観光客という立場で行われるようにした。説明書がなくても内容が理解できたかどうか、訪れた場所に興味を感じたかどうか、観光客の年齢や社会的背景を考慮した表現や場所の選択であったかどうか、という観点で評価することも重要である。

(3) ボランティア活動の実施

前述の受け入れ先との合意により実施される。大学側には双方の合意書を提出する。これに関連した事情については後ほど触れることとして、まず、学生たちが参加したボランティア活動について列記する。

- * 淡水古蹟博物館（紅毛城・小白宮・滬尾砲台）で、専門ガイドのアシスタント及び日本人観光客に対する道案内や質問に答える。（各人複数回実施）
- * 一滴水記念文庫で、神戸からのゲストに移築過程について説明する。
- * 京都橘大学の教育実習生を対象に、淡水の歴史的遺跡をめぐる観光ガイドをする。（個人差はあるが、複数回）
- * 名古屋産業大学中国語研修生対象に淡江大学内を中心にガイドをする。
- * 金城学院大学教育実習生を対象に、淡水古蹟博物館・馬偕博士旧跡・老街などのガイドをする。
- * 本学科主催国際シンポジウム参加の日本人来賓を対象に、淡水の歴史的建造物や日本統治時代の旧跡など、来賓の要望に合わせてガイドする。北京大学の学術関係者を案内するような日本語を使わないボランティアもある。

振り返ってみると、実際、学生が日本語を運用する機会が多く、通訳観光ボランティアの必要性を最も強く感じるのは、学科に関係

のある日本人来賓の方や教育実習生、留学生を観光案内するときである。しかし、社会とのかかわりという点では、地域貢献としてのボランティアを通して、学生たちの学んだことは多い。次にボランティア活動の意義について考察してみたい。

2.3 観光ボランティア活動を授業に取り入れる意義

(1) 日本語教育の視点からみた意義

【1】通訳ガイドボランティアとしての学習

本学科は日本語学科であることから、学生の習得した日本語を学外で運用することにより、自己の日本語能力を見直し、新たな学習の必要性を感じて習得しようとするすることで、スキルアップを図ることができる。学生の体験学習による教育効果の実現である。米国のキャンパス・コンパクト (Campus Compact) 発行のサービスラーニングのパンフレットによると、6つのモデル⁵があげられているが、本学科で実施した観光ボランティアは「純粹型——学生の学習課題と社会貢献活動が密接に結びついている場合」や「学習総括型——これまで大学で学んだ科目を総合的に実社会の中で実践する」に当てはまると考える。

ここで実施するガイドの活動というのは、日本では国土交通省の定める「通訳案内士 (通訳ガイド)」⁶にあたる。社会貢献としてのボランティアについては資格の有無を問われるものではないが、ガイドを職業選択の一つと考えている学生にとっては、インターンシップ的な機会でもある。実際、「自分の適性を試すよいチャンスであった」と感想を記している学生もいる。この授業においては、今までに学習してきた日本語の五技能を発揮して、「通訳ガイド」という課題を解決することが学習目的である。

⁵ 〈1〉純粹型 〈2〉学科ベース型 〈3〉社会課題解決型 〈4〉インターンシップ型
〈5〉学習総括型 〈6〉実地調査学習型(村上徹也「米国におけるサービスラーニング」)

⁶ 日本の国土交通省が認証する国家資格である。観光客に対して外国語通訳や観光案内を行うことができる。旅行関係の資格試験の中では非常に難しい国家試験と言われる。

【2】通訳ガイドとしての自覚と学習

事前学習の中国語の講義資料と自分のメモを中心に、教室での発表に備えて、日本語訳をまとめていくという作業において、「こんなに大量の資料の翻訳は初めてであったが、力不足を感じることで刺激になって、もっと頑張ろうと思った」「ガイドが理解できていないことは伝えられない」という感想があった。確かに負担は大きかったかもしれないが、新しい知識獲得が新鮮な刺激となって、納得できるガイドをしたいという意欲となっている。例えば、学生の提出したレポートには[小学生向け][中・高校生向け][大学生向け]と分けていたものがあり、日本語の語彙レベルと、説明の方法を使い分けていた。これは、一度ボランティア活動に参加して、専門のガイドの仕事を観察した経験から、その必要性を感じたものである。また、記憶と整理能力の重要性を強調した者もいた。事前学習で全員が同じ場所を回り、同様の情報を得ているはずにもかかわらず、情報が漏れていたり、まとめ方の違いで、聞き手の興味を逸らしてしまうこともあるので、「記憶と要点整理」が成功するか否かの鍵になると実感したからだと思われる。

そのほにも、実際にボランティア活動を通して、専門ガイドの話し方を傍で聞いたり、実際の観光客の反応も身近で感じたことにより、教室での観光ガイド・シミュレーションが順調に行えるようになっていく。教室でのクラスメートからのフィードバックも上手になり、コースデザインに対する質問や助言も聞き手側の学生から出されるようになった。自分が学んだ内容や自分でも興味を持ったことについて、「伝えたい」というモチベーションが高まったからだと見える。実際、「小白宮を案内するテクニックが不十分なので、より一歩進んで学習を始められるように専門の案内者に学びたい」と、学生の意識が教室活動から社会へとつながっていく様子が見られる。また、「見学した所は日本人にあまり知られていないので、日本語でどのように説明したらわかりやすいか、早めに準備しておかなければならない」という日本語通訳ガイドとしての自覚が見られる。

【3】学びによる成長

学生の感想の中で多いのが、「人前で話すことに自信が出てきた」ということであり、「説明や話し方が流暢になった」と実感していることがわかる。ほかにも、上述したような自覚が芽生え、学生自身が学習の成果を感じている。

これは、社会性のある他者との関わりの中で学びとってきたものだといえる。全体の80%の学生（アンケート結果）が、ガイドボランティアクラスにおける教育的意義と実用性の効果を高く評価していることがわかる。そして、ガイドの専門知識と歴史的知識及び日本語の習得ができたと認めている学生70%近くもいることがわかる。

このように振り返ると、学生の個人的成長や教室風土の変化は、このクラスが日本語会話クラスであることを考えると、通訳ガイドという、実際にはなかなかチャンスのない職種をボランティア活動という形で経験する意義は大きい。話そうとするモチベーションにはいろいろあるが、はっきりとした目的と知識に裏付けられた関心、そして、社会（コミュニティ）に参加することで求められる責任感をもって言語行動することは、学生にとって大切な「学び」となっている。そして、体験学習を通じて、自己に対する気づき「自己との対話」⁷があり、そのことが必要な知識や日本語技能の習得への新たな動機づけとなっていることがわかる。これは日本語教育的にも評価されるものであろう。この点については次でも言及する。

（2）地域社会への参加及びボランティア活動の視点からみた意義

ボランティア活動が日本語会話科目の単位認定の条件となるため、大学側の実施規定に照らして、ボランティア実施先を探すことになった。もともと淡水の観光案内をするためのボランティア通訳ガイドであったので、必然的に台北県の観光行政に協力する形で、台北

⁷ 「自己との対話」「他者との対話」というのは、レイブとウェンガー（Lave, J&Wenger）が提唱した社会における実践の場、他者との協働を行う場としての「実践コミュニティ」という考え方に基づいて使われている。

県立淡水古蹟博物館でのボランティア活動が実施された。人手が足りなくてお手伝いするという労働力提供のボランティアではなく、必要とされる時のために職場で実習をさせていただくといった意味合いがあるので、どちらかというところ、職業体験というインターンシップに近いものであった。実際には博物館のガイド資格試験を受験していないので、あくまでも補助員的な仕事であるが、社会との接触があり、専門職に対する認識を深めていることがわかる。実際の観察だけでなく、休憩時間を利用した雑談で聞いたガイドスタッフの経験談から学んだことも大きかった、という感想もある。ここのスタッフは中国語の専門ガイドであるので、通訳ガイドとしては、学生自身の観察と経験と知識から学んでいかなければならないが、「社会（コミュニティ）の一員」としての心構えやガイドとしての心構えなどについて理解を深めることができた、とアンケートに回答している学生は多い。

学生からの反応はサービス日誌や反省記録、アンケートの回答にも示されているので、ここではクラス担当者からみた意義について、総括的に述べてみたい。

【1】地域社会の一員としての自覚

ある技能を習得し、社会性を身につけるには、社会の中で具体的な活動や体験を通して学ぶことが効果的であるとはよく言われることである。ボランティアクラスを履修した23人の学生達は週末などを利用して、全員が規定のボランティア活動時間数をこなした。ボランティア実施先との事務的連絡は、ボランティア授業のTAである劉徳敏が窓口となって、学生のサポートに当たってくれた。そこで最初に問われたのは、学生ではあるけれど、社会人（職場の一員）としての自覚の問題である。もちろん、全員非常に真面目に実習したということは、実習終了後の指導監督者からの高い評価からもわかったが、最初は退勤時の挨拶もきちんとできないまま帰ってしまった者もいたり、タイムカードの押し忘れがあったり、自分の配置場所を間違えたこともあったが、次第に周囲に迷惑をかけたり、仕

事に支障をきたしてはいけないという自覚が育っていったことがわかる。

そのほか、職業としてのガイドの仕事を冷静に観察していることがわかる。学生の感想には、教科書では学べないことがたくさんあったと指摘しており、ガイドという職業に対する自分の適性を考える上でも、就職に役に立つというのもあった。また、淡水という町への愛着が湧いてきたという学生が多く、きれいな河や美しい景観を守っていくための環境保護に関心をもつべきだという、社会への積極的な関わりをもつ姿も見受けられるようになった。このクラスを履修するまでは、老街以外は紅毛城すら行ったことのない学生が多かったことを思うと、ボランティアガイドクラスの開講は、少なくとも本学科の学生が淡水という地域を理解するいい機会であったことがわかる。

自分たちの大学がある町で暮らし、その歴史と文化を学んだことで、淡水への愛着がわき、ぜひ後輩たちにも淡水をもっと知ってほしいとのメッセージを、多くの学生が残している。地域とのかかわりにおいて、地域の一員としての自覚と協和の精神が育ったと言えるのではないかと考える。地域社会への参加は、学生が周囲の大人や職業専門家に接して学んでいくことであり、教室だけの授業に比べて、内省の機会が多く、個々の学生が多面的に成長していったことがわかる。「失敗あってこそその成長」であると自らの失敗を述べ、その経験は貴重なものだったと話し、みんなと一緒に頑張ろうと呼びかける者もいた。

学期途中の活動を振り返るグループごとの反省会や、最後の授業でのスピーチは事後学習にあたるもので、お互いの経験を共有して、学生自らの気づきを深化させていく意味がある。

【2】職場体験学習からの学び

淡水古蹟博物館での実習で、学生達に共通していることは、ガイドスタッフの専門家としての仕事ぶりに感銘していることである。この博物館には小中学生の団体も多く訪れるし、年配者のグループ

もある。小学生にはゲーム的要素を取り入れて説明し、賞品を用意して、子供達の興味を逸らさない工夫がなされていたことを報告していた。また、同じ観光スポットの説明でも、知識を全て伝えるのではなく、観光客のニーズや背景を考慮していることや、ガイドスタッフの声の大きさや顔の表情、視線にも注目していたことがわかる。また、聞き手の顔をしっかりと見て、反応を確かめながら、案内していることにも気づいている。

一方、観光客の立場を考慮して、ガイドとしての気づきも多かった。例えば、観光客によって関心が違うので、観光スポットの優先順位を事前に把握しておいたほうが親切であるとか、老街のような商店街では、呼び込みの声でガイドの説明が聞こえにくいので、説明場所を考慮すべきであるとかというものがあつた。また、年配者の場合には歩く距離が長い所は避けたほうがよい、人が多いと移動中に距離ができて、後ろの人たちはガイドの説明を聞き逃す惧れがある、聞き手は心地よくガイドの説明に耳を傾けているか、交通の便を考えて、負担の少ないコースデザインをしたか等々、実践がなければ決して思いつくことはなかったであろうと思われる気づきがたくさんあつた。

ここでわかるのは、学生が専門ガイドの行動を観察することで、自己の学習や技能を見つめ直す（検証する）自己との対話と、観光客という対象の存在に気づき、相互のコミュニケーションの重要性（意義）を理解するという他者との対話がなされていることである。

この「自己との対話」「他者との対話」というのは、先にあげたように、レイブとウェンガー（Lave, J&Wenger）が提唱したものである。森川は「新人はコミュニティの熟練者たちの実践を周辺から観察していく。新人は熟練者の仕事の進め方、日常的な振舞い方、エチケット等を傍観し、実践に必要な技能・知識を包括的に自己の身体に染み込ませていく」⁸と指摘している。

⁸ 森川与志夫（2008）「観光ボランティアガイド活動体験における学び—高校生

そのほか、学生達が参加した社会の一員としての自覚と問題意識をもち、積極的に関わっていかこうとする姿勢も見られる。例えば、日本語の解説文に誤りがあるとか、標識が小さくて迷いやすいなど、建設的な意見を博物館のスタッフに伝えて、改善しようとする行動力もみられる。また、滬尾砲台の観光客が極端に少ないことについて、もっと宣伝する方法や観光地としての改善策はないものかと、問題提起している学生もいた。教師の予想以上にコミュニティと積極的に関わっていかこうとしていることがわかる。

2.4 授業におけるボランティア活動の課題

(1) ボランティア活動を必修専門科目の単位として認定する困難さ

上述したように、受け入れ先との合意により実施されるので、大学側には双方の合意書を提出し、教務課学務係の承認を得た機関のボランティア活動時間数しか認められていない。現況は以下の通りである。

★各学期 18 時間のボランティア活動の実施。合計 36 時間であるが、一学期に 18 時間を越えてはならない。学期ごとに 2 単位の評価を出さなければならないので、一学期末試験終了後の冬期休暇を利用したボランティア活動は、単位認定の時間として認められない。

★ボランティア受け入れ先は学外とする。さらに営利を伴わない公的機関に限る。例えば、日本の高校の修学旅行生のガイドは旅行社を通してしているので、交通費と弁当代だけの支給であっても、ボランティア活動の時間には数えられない。旅行社から学科への協力依頼は多いが、サービス課程は日本語学科の開講科目であるため、契約できない。従って、本学科の来賓や留学生の観光案内は、ボランティア活動の単位認定の時間として認められない。

★年間4単位の会話の授業時間とは別に36時間を受講とボランティア活動に費やすことになる。単独のボランティア科目として成立していないために、ボランティア科目と専門科目を二つ履修するのと似た状況である。

(2) ボランティア評価と専門科目の評価の統合性の難しさ

「ボランティア課程のガイドクラス」という位置づけは、評価する時に難しさを伴う。一般的に考えれば、ボランティア科目を履修している学生は当然ボランティアを希望しているのであるから、その活動を評価してボランティアの単位を認定すればよい、ということになる。しかし、本学科開講の「ボランティア課程ガイドクラス」は、ボランティア活動時間を大学が一般教養科目的に認めて、単位を認定するものとは違う。本学では日本語会話(四)の科目として成績を出さねばならない。教科の能力評価とボランティアの評価を総合的にどう評価していくかは、担当教師にとって難しい問題である。

日本語能力とは異なる面での個人の成長とか、ボランティアの体験学習が専門の学習にどう働いているのか、などについての評価をどうすればよいか。当然ゼロにはできない。逆にそれを評価しないのなら、ボランティアを大学教育に取り入れる意味がなくなる。

ボランティアをまったく別の教養科目として位置づけて単位を認定し、可否の評価のみにすることの検討がされてもいいのではないだろうか。実際、社会貢献とか、本人が自分の弱点を克服して成長する力や、将来への可能性を素点化することなど無理なのではないかと思える。

3. おわりに

一年前には、学生がどこまでやり遂げられるのかイメージするのは難しかったが、結論としては、想像を超える成長を見せてくれた。それは、授業担当の教師からは決して学び得ないものである。彼らは周囲に学びながら成長していったと言える。

ボランティア活動を通して地域社会へ参加することは、学生が周囲の大人や職業専門家に接して学んでいくことであり、教室だけの授業に比べて、内省の機会が多く、個々の学生が多面的に成長していくことがわかる。ある学生が教室でのスピーチで、「四年近く日本語を学習しても、実際にガイドをしてみると、これくらいしかできないということがわかり、悔しかった。でも、悔しいと思ったから、頑張ろうという気持ちになった」と話していた。また、「無口で愛想が悪い自分」や「人前で話すとお腹が痛くなる私」、「親しい友達がない私」といった学生達が、「ボランティア活動を経験して変わった」と、クラスメートの前でスピーチできるようになった。

総じて、最後の授業のスピーチでは、「楽しかった」「来年もこのクラスがあることを望む」「ボランティア実習をクラスメートと一緒にして、お互い理解できるようになった」という前向きなものであった。そして、多くの学生が「淡水をもっと多くの人に知ってもらいたい」で結んでいた。

教室活動には、学期途中の活動を振り返るグループごとの反省会や、総括的なスピーチがある。これらはサービスラーニングにおける事後学習にあたるものだが、お互いの経験を共有して、学生自らの気づきを深化させていく意味がある。そういった意味では、彼らは社会参加としてのボランティア活動のみならず、教室活動においても、インターアクションを通じて共感し合い、相互学習を進めていったことがわかる。

引用インターネット資料

- (1) 村上徹也「米国におけるサービスラーニング」『日本奉仕協会』 <http://homepage.mac.com/tkaizawa/japan-usSLexchange/>
- (2) 広島大学産学・地域連携センター「サービスラーニング研究会」(2006)
home.hiroshima-u.ac.jp/yukuo/servicelarning.htm
- (3) ICU 国際基督教大学教養学部 HP 「サービスラーニング」
www.icu.ac.jp/liberalarts/service.htm

引用文献

- (1) 藤田久美 (2009)「大学の授業における『ボランティア』の教育方法に関する一試論」山口県立大学学術情報 『福祉学部紀要』第2号
133-150
- (2) 森川与志夫 (2008)「奈良県立法隆寺国際高等学校 観光ボランティアガイド活動体験における学び——高校生の実践コミュニティへの参加分析を通して——」『国立青少年教育振興機構研究紀要』第8号
187-194

参考文献

- (1) 森定玲子 (1999)「ボランティア活動は大学改革の切り札になるのか？」『月刊ボランティア』大阪ボランティア協会 (№348 1999. 9)
- (2) レイブ, J. エチエンヌ, W. (1993)「状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加」佐伯胖訳 産業図書
- (3) 桜井政成・津止正敏 (2009)「サービスラーニングの原理と実践」『ボランティア教育の新地平』ミネルヴァ書房
- (4) 立命館大学ボランティアセンター 「本学のボランティア教育理念」 www.ritsumei.jp/indexi.html
- (5) 明治学院大学ボランティアセンター 「ボランティアセンターの役割と展望について——教育プログラムと3者協働プロジェクトの両輪を軸とした取り組みから——」

www.meijigakuin.ac.jp/index.html

(6) 池田幸也 「大学におけるボランティア活動の推進・支援の現状と課題」 独立行政法人日本学生支援機構 (44—49)

www.yokohamashakyo.jp/yvc/gaido/daigaku4.pdf

